

全3回配本・全10巻
解説・総目次・索引附

収録底本 『民主報徳』 第1-57号（報徳同志会新聞部、1948.4.—1952.12.）全56号
『報徳青年』 第1巻第1号 - 第7巻第1号（報徳青年運動本部、天地社、1947.5.—1954.1.）全49号
『報徳』 第44巻第4号 - 第51巻第12号（大日本報徳社、1945.11・12.—1952.12.）全80号（附録含む）
※『報徳青年』は、終刊と考えられる1954年1月号までを収録した。

配本	収録巻	収録内容	定価	ISBN-No (978-4-8350)	刊行予定
配本予定	第1回	第1 - 3 巻 (全3巻)	協定価 68,200 円 (揃本体 62,000 円+税 10%)	8405-3	2021 年 6 月
	第2回	第4 - 6 巻 (全3巻)	協定価 66,000 円 (揃本体 60,000 円+税 10%)	8409-1	2021 年 11 月
	第3回	第7-10 巻 (全4巻)	協定価 88,000 円 (揃本体 80,000 円+税 10%)	8413-8	2022 年 1 月

排除の弾圧政策と異なる、総力戦体制への
包摂の構造を明らかにする—— 前田一男 (推薦)

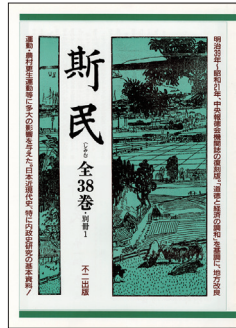


全2回配本・全6巻・別冊1

「非常時日本」に「教化」を掲げ、1930年代から拡大した総力戦体制を支えた「教化運動」、そのほぼ全号を収録。国民の「思想善導」を企図し、「国民更生運動」などから「国民精神総動員運動」へと突き進んだ教化運動の全貌が明らかに。

解説 須田将司（東洋大学教授）
推薦 井上寿一・前田一男・米田俊彦

掟定価 187,000円 (掟本体170,000円+掟10%)
体裁 B4判/上製/掟約2,600頁
底本
中央教化団体連合会『教化運動』第1-297号
(1930年8月—1944年3月)
※第90,184,203,219号欠。『近畿附録』全13号収録。
中央教化団体連合会『中央教化団体連合会会報』第5,7,8号
(1928年12月—1929年12月)
◎**第1回配本 (第1-3巻)**
収録内容:『教化運動』第5—151号/
『中央教化団体連合会会報』第7・8号
掟約1074頁/掟定価92,400円 (掟本体84,000円+掟10%)
ISBN978-4-8350-8254-7 2018年11月刊行
◎**第2回配本 (第4-6巻)**
収録内容:『教化運動』第1—4,6,152-297号/
『中央教化団体連合会会報』第5号
掟約1340頁/掟定価94,600円 (掟本体86,000円+掟10%)
ISBN978-4-8350-8258-5 2019年9月刊行
◎**別冊『教化運動』解説・掟目次・索引/並製276頁**
定価3,300円 (本体3,000円+掟10%)
ISBN978-4-8350-8263-9 ※分売可



報徳思想研究にとどまらず、地方自治・農政史をも含む日本近現代史研究に
広く活用される『斯民』、全40編全471号を復刻。
中央報徳会の機関誌『斯民』は、二宮尊徳の「報徳」理念を採用、「道徳と経済
の調和」を基本理念として、地方自治に大きな影響力をもった。本誌こそ、
戦前の報徳運動の展開を知るうえで欠かすことのできない貴重な資料である。

解説 金沢史男（元横浜国立大学教授）
推薦 海野福寿・宮崎隆次・宮地正人・和田守
揃定価 **844,800円**（揃本体768,000円＋税10%）
体裁 A4判（4面付）・上製・総約14,200頁
◎第1回配本（第1-3巻）／別冊 1906年4月—1909年3月
揃定価74,800円（揃本体68,000円＋税10%）
ISBN978-4-8350-1537-1

◎ **第2回配本 (第4-8巻)** 1909年4月—1914年3月
 揃定価110,000円 (揃本体100,000円+税10%) ISBN978-4-8350-1542-8

◎ **第3回配本 (第9-13巻)** 1914年4月—1918年12月
 揃定価110,000円 (揃本体100,000円+税10%) ISBN978-4-8350-1548-7

◎ **第4回配本 (第14-18巻)** 1919年—1923年
 揃定価110,000円 (揃本体100,000円+税10%) ISBN978-4-8350-1554-1

◎ **第5回配本 (第19-23巻)** 1924年—1928年
 揃定価110,000円 (揃本体100,000円+税10%) ISBN978-4-8350-1560-8

◎ **第6回配本 (第24-28巻)** 1929年—1933年
 揃定価110,000円 (揃本体100,000円+税10%) ISBN978-4-8350-1566-5

◎ **第7回配本 (第29-33巻)** 1934年—1938年
 揃定価110,000円 (揃本体100,000円+税10%) ISBN978-4-8350-1572-x

◎ **第8回配本 (第34-38巻)** 1939年—1946年
 揃定価110,000円 (揃本体100,000円+税10%) ISBN978-4-8350-1578-9

◎ **『斯民』目次総覧 (新版)** 金沢史男 (解説)・酒田正敏 (解題)
 B 5判/上製/450頁/定価8,800円 (本体8,000円+税10%) ※別冊、分売可

不二出版

〒112-0005
東京都文京区水道2-10-10
TEL 03-5988-1670
FAX 03-5988-1670
振替 001600294084

2021.6.

全3回配本・全10巻

資料集成

解説・総目次・索引附

編集・解説 見城悌治 千葉大学大学院国際学術研究院教授 須田将司 東洋大学文学部教授
刊行のことば 驚山恭彦 大日本報徳社社長・東京学芸大学名誉教授
推薦 落合功 青山学院大学経済学部教授 奈良岡聰智 京都大学公共政策大学院教授
資料協力 公益社団法人大日本報徳社 公益財団法人報徳福運社 報徳博物館

全國の青年に訴う

日本再建の意氣にもゆる
「日本再建青年」愛讀者一萬へ——
あるのみです。そして全

[illegible]

みように思うの。先づ試みに
ではないでせうか。然し主義・イ
に生れたものです。政治・経済・思想・文藝・科学等
に傾してゐます。心と血の

「報徳青年」は店頭でなく、研究會・讀書會を以て全國にひろげたいのです。愛讀者組織を基本にして、追放と愛讀の道を歩みたいのです。

◎敗戦後の日本において、報徳運動は、二宮尊徳はいかにしてよみがえったか――

戦前期の活動が批判された報徳運動、その敗戦直後から占領が終結する一九五二年までの復活の軌跡を跡づける基礎資料。

「新生日本」における尊徳思想の実践を志した報徳関係雑誌、『報徳』、『報徳青年』、『民主報徳』の3誌をついに復刻！

不
二
出
版



種生花寶輪廻之圖

復刻の辞

見城悌治・須田将司

「二宮金次郎」と聞いて「薪を背負い、読書する少年像」を想起できる人は、今日でもかなりの数にのぼるだろう。しかし一方で、その少年が長じて尊徳（一七八七―一八五六）となり、江戸時代末期の関東周辺で農村復興に貢献したことを知る人は、それほど多くないと思われる。尊徳のもてその方法を学んだ農民たちは、後にそれぞれの地元に戻り報徳社を組織、維新後の急激な近代化に立ち向かっていく。そうした結社のなかで最も有力なもののひとつが、一八七五年に静岡県掛川町で創設された遠江国報徳社である。

二宮尊徳の報徳思想は、日露戦争後の時代に至ると、疲弊した社会を立て直す特效薬として注目された。内務省の主導する地方改良運動のさなか、半官半民的な中央報徳会がその活動を展開したほか、日本各地において報徳社の新設が奨励されていた。その渦中にある、遠江国報徳社は一九一一年に大日本報徳社と改名し、報徳運動の中核たらんとする意志を示した。以後、同社ひきいる報徳運動は、第一次大戦後の民力涵養運動、昭和恐慌後の農山漁村経済更生運動などにおいて、農村指導や思想善導に大きな役割を果たした。

こうした戦前の実績は、経済史、政治史、思想史などの各分野において研究が深化されている。さらにそのための資料についても、今回収録した大日本報徳社の機関誌『報徳』の前身にあたる『大日本報徳』など、一八八三年から一九四五年までの雑誌をまとめた『日本報徳運動雑誌集成』全47巻・別巻1（緑蔭書房）や、一九〇六年から四六年までに刊行された中央報徳会の機関誌『斯民』なども復刻されている（全38巻・別冊1、龍溪書舎、のち不二出版）。だが一方で、戦後の日本社会において報徳運動がどのような役割を担ったかについては、研究が十分に進んだとはいえないのが現状である。

一九四五年八月の敗戦は、報徳運動にとっても転換点となった。報徳思想は「道徳」と「経済」を車の両輪と考えるが、その一方の柱である「道徳」

について、関係団体は「教化団体」的な性格をも有したがためにその存否が問われた。しかし一方、もう一つの柱である「経済」、すなわち「生活復興」のための食糧増産指導などに対する期待は大きく、また「二宮尊徳が「民主主義者」とGHQ幹部に評価されたことなどによって、最終的にその存続が認められた。

報徳運動の関係団体は、その後も在野で地道な活動を展開し、現在に至っている。だが大日本報徳社はじめ関連団体の敗戦直後の刊行物を所蔵している図書館は稀で、その足跡を辿ることは容易ではない。

このたび『占領期 報徳運動資料集成』全10巻として、雑誌『報徳』、それに『報徳青年』（報徳青年運動本部、天地社）、『民主報徳』（報徳同志会新聞部）と併せて復刻することとなった。とりわけ『報徳青年』は、GHQが検閲・蒐集した「プランゲ文庫」などで閲覧できる号数を大きく上回っており、未知の号も多く含んでいる。

これらの雑誌を読むことで、幕末以来の歴史を誇り、主に在野の民衆とともに歩んだ報徳運動が、敗戦時の社会変動にどのように対応したか、新機軸として何を掲げたかなどが明らかになるはずである。今回の復刻は、その対象時期をあえて「占領期」で区切った。それによって、未曾有の社会的変化において民衆由来の「報徳」の思想と方法とが、新たな「民主主義」社会の構築に向かう人びとにいかにも再受容され、彼らをどう支えたかを読み取ることでできると判断したためである。

日本近現代史に興味をもつ人、とりわけ戦前と戦後における社会、教育、思想、文化などの「連続」と「断絶」に関心を寄せる人には、ぜひ手にとっていただきたいと考えている。

（けんじょうていじ・千葉大学大学院国際学術研究院教授／
すだまさし・東洋大学文学部教授）

刊行のいっぽ

――遠きを測らんとする尊徳の眼差し――

鷺山恭彦

戦前、二宮尊徳の「富国安民」の思想は、大日本帝国の下で「富国強兵」の政策に組み込まれた。アジア・太平洋戦争末期には御真影と教育勅語、そして「二宮金次郎像が戦争遂行の道具になった」と批判された。戦後の報徳運動はその反省から、「民主報徳」を掲げて新しく出発している。

このたび『占領期報徳運動資料集成』全10巻として復刻される雑誌、『報徳』（大日本報徳社）、『民主報徳』（報徳同志会新聞部）『報徳青年』（報徳青年運動本部、天地社）は、戦後の民主主義的変革のなか、これまでの在り方と新しい生き方のはざまで求道し実践する、報徳社に結集した人々の興味深いドキュメントである。これまで、戦前の報徳運動を解明する資料として、大日本報徳社の『大日本報徳』を含む『日本報徳運動雑誌集成』全47巻・別巻1（緑蔭書房）や、中央報徳会の機関誌『斯民』全38巻・別冊1（龍溪書舎、のち不二出版）が復刻されてきた。このたび不二出版が、いよいよ戦後の報徳資料の出版を決断されたことを、心強く感じている。

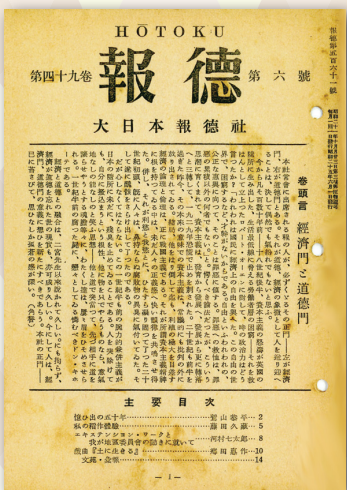
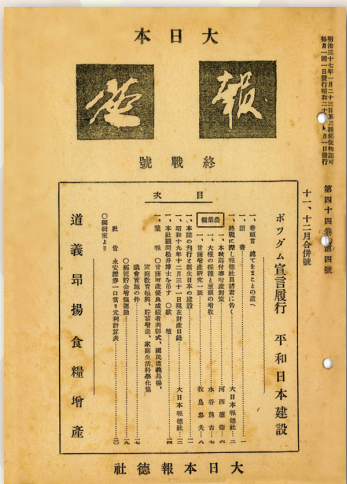
敗戦後の荒廃した状況で、新しい日本をつくらんとしたこれら先人たちの意欲と努力、遠きを測らんとするその眼差しは、コロナ後の生き方が求められる現代の私たちへの指針となる。新しい経済と社会のヴィジョンが求められる今、彼らの発言は私たちに強いインパクトを与えてくれる。本資料集成は、戦後精神の一つの軌跡として、これからさらに考究されるべき刺激的な素材に満ちている。

（わしやまやすひこ・大日本報徳社長 東京学芸大学名誉教授）

配本		収録誌（発行）		巻数		収録号数／発行年月	
第1回		民主報徳 【報徳同志会新聞部発行／月刊／タブロイド判／平均2頁】 解説・須田将司 総目次・索引附		第1巻		第1号（1948年4月） ―第57号（1952年12月）	
第2回		報徳青年 【報徳青年運動本部、天地社発行／月刊／B6判／平均46頁】 解説・見城悌治（第2巻収録） 総目次・索引附（第6巻収録）		第2巻		第1巻第1号（1947年5月） ―第1巻第10・11号（1948年9月）	
				第3巻		第2巻第1号（1949年7月） ―第3巻第4号（1950年4月）	
				第4巻		第3巻第5号（1950年5月） ―第4巻第4号（1951年4月）	
				第5巻		第4巻第5号（1951年5月） ―第5巻第5・6号（1952年6月）	
				第6巻		第5巻第7号（1952年7月） ―第7巻第1号（1954年1月）	
				第7巻		第44巻第4号（1945年11・12月） ―第46巻第5号（1947年6・7月）	
				第8巻		第46巻第6号（1947年8月） ―第48巻第6号（1949年6月）	
				第9巻		第48巻第7号（1949年7月） ―第49巻第12号（1950年12月）	
				第10巻		第50巻第1号（1951年1月） ―第51巻第12号（1952年12月）	
第3回		報徳 【大日本報徳社発行／月刊／A5判（B6判含む）／平均24頁】 解説・見城悌治（第7巻収録） 総目次・索引附（第10巻収録）					

※構成は変更となる場合がございます。

表紙画像：右下「種生花実輪廻之図」（「二宮尊徳翁自筆草案」）／左上「全国の青年に訴う 日本再建の意気にもゆる『報徳青年』愛読者一万へ」（『報徳青年』ピラ、本資料集成第2巻収録）／左下 二宮尊徳像（大日本報徳社大講堂内）



■『報徳』表紙：上から、第44巻第4号（1945年11・12月）、第49巻第6号（1950年6月）、第51巻第3号（1952年3月）

推薦のごとき

報徳思想は「新生日本」で何ができたのか

落合功

近世史研究家にとって二宮尊徳といえば、農村復興の担い手として知られる。近代以降になると、学校の片隅に設置された新を背負った二宮金次郎像が、道徳教育に登場してくる。だが戦後の高度経済成長、大衆消費社会のなかで、節度を守り倹約することを規範とした報徳思想は、下火になっていく印象があるだろう。

しかし、もはや恒常的とも思えるマイナス金利の現在、無意味なはずにもかかわらず、日本人の貯蓄精神は健在だ。一部を除いて、おおよその人々は贅沢をせず、分をわきまえた生活を送っている。そして、この高額な貯蓄こそが世界に類をみない借金大国・日本を支えている。

ご存じだろうか。二宮尊徳が一円紙幣として、一九四六年三月一九日から五八年一〇月一日まで使用されていたということを。同時期に発行された五円紙幣や十円紙幣に肖像はついていない（五円紙幣は彩紋、十円紙幣には国会議事堂。一九五一年二月に発行された五十円紙幣は高橋是清が肖像となっている。紙幣の肖像は当時の世相やメッセージを体現することが多い。果たして敗戦直後の二宮尊徳には、何が求められたのだろうか。『占領期 報徳運動資料集成』全10巻が刊行されるという。具体的には、平和日本、民主主義の新生日本建設を掲げて、食糧増産の手法を具体的に記し、喫緊な事態に対応しようとした雑誌『報徳』（大日本帝国報徳）として明治二五年より発行。大日本報徳社・掛川。なお、本資料集成は昭和

二〇年一・二月号以降を収録。多感な青年に向けて協同の思想を基礎に日本再建を訴えた『報徳青年』（昭和二年五月創刊。報徳青年運動本部、天地社・東京都）。そして現代化、大衆化、社会化を目指して、二宮尊徳の言行を現代の生活や仕事に生かすことに主眼をおいた『民主報徳』（昭和三年四月創刊。報徳同志会・小田原）。占領期におけるこれら三雑誌が、今回復刻される。

三誌それぞれ、個性ある編集がなされている。だが国民全体が敗戦による価値観の喪失を経験するなかで、尊徳本来の思想に立ち戻りつつ、「新しい日本の建設」のなかに報徳思想を位置づけようとしたこれらの雑誌には、多くの共通点を見い出すことができるだろう。そしてこうした雑誌を通じて、当時の報徳運動の全体像、ひいては日本社会再建の一過程を俯瞰することができるに違いない。

敗戦を目のあたりにし、日本人はそれまでの価値観を喪失したとされるが、すべてが失われたわけではない。戦時下の軍国主義と極端な国家主義が霧消し、民主主義という新たな価値観が模索されるなか、近世から存続する報徳思想は、何を失い、何を残そうとしたのか。またGHQは報徳思想に何を期待したか。本資料集成がその答えを導いてくれることを期待したい。

（おちあいこう・日本経済思想史学会代表幹事、青山学院大学経済学部教授）

推薦のごとき

占領期の幅広い領域の研究を大きく進める貴重な基本資料

奈良岡 聰智

このたび不二出版から、大日本報徳社およびその関係者が占領期（一九四五―五二年）に刊行した雑誌三誌が『占領期報徳運動資料集成』全10巻として復刻出版されるという。『報徳』は同社の機関誌で、同社の基本的な考え方、活動について知るうえで必須の史料であるが、全国の大学図書館などにはごく限られた号しか現存せず、国会図書館にもまったく所蔵がない。幸い戦前のものは既に復刻出版されているものの、戦後分は未復刻で、これまで入手が困難だったことから、基礎的な事実ですら不明な点が少なくなかった。このたび同雑誌に加えて、ほぼ未知の史料であった『報徳青年』（報徳青年運動本部、天地社）、『民主報徳』（報徳同志会新聞部）が復刻されたことにより、終戦前後の激動期における同社の動きが容易に分かるようになった。今後本資料によって、大日本報徳社が終戦後いかなるかたちで再出発を図ったのか、報徳運動が戦前から戦後にかけてどのように変化したのか、またしなかったのが解明されることになるだろう。

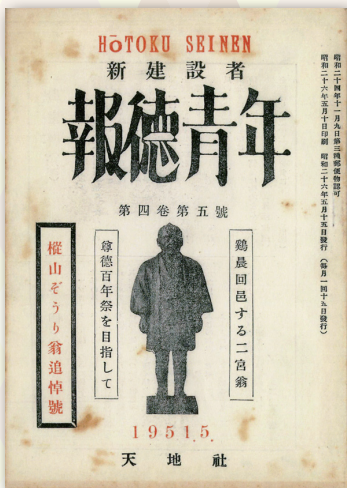
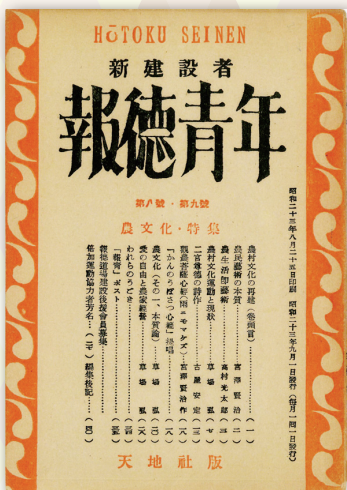
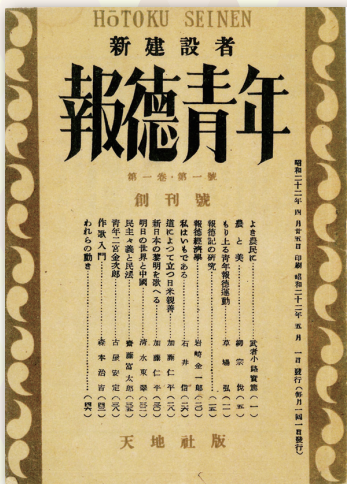
私はこの数年、『河井弥八日記 戦後篇』全5巻（信山社、二〇一五―二〇年）という資料集を、仲間たちと一緒に毎年刊行してきた。河井は、侍従次長、貴族院議員などを歴任し、戦後は参議院議長まで務めた人物であるが、一九四五―六〇年には大日本報徳社の社長の座にもあった。そのため同日記は、報徳運動関係の記述が大変充実しており、河井が報徳思想

を「新生日本の建設」のための精神的支柱にしようとしていたこと、戦時中の活動が占領軍から問題視され、解散の危機に直面した際、河井らが社を挙げて占領軍の視察団に働きかけた結果、同社が解散を免れたことなどが、日記の記述から分かる。

残念ながら日記編纂時には、『報徳』などの史料をあまり参照できなかったため、私が執筆した課題では十分に考察を深めることができなかったが、同誌には占領軍のインボorden少佐（民間情報教育局新聞課長）による視察に関するものなど、関連記事が多数掲載されている。今後は『河井弥八日記』と本資料集成を併せて検討することにより、報徳運動のさまざまな問題について、立体的・多角的に分析することが可能になるだろう。幸い『報徳』には、河井の考えを示す演説、彼の名前で出された各種文書などが、豊富に含まれている。また、河井のみならず、佐々井信太郎、鷲山恭平といった大日本報徳社幹部の論説も数多く掲載されている。さらに、丸山方作らが推進した甘藷増産の記事も豊富にあり、戦後の食糧問題の研究にとっても不可欠の好史料といえる。

総じて本資料は、報徳運動のみならず、占領期の政治史、思想史、教育史、農業史など幅広い領域の研究を大きく進める貴重な基本資料である。多くの読者を得て、広く利用されることを期待したい。

（ならおかそうち・京都大学公共政策大学院教授）



■『報徳青年』表紙：上から、第1巻第1号（1947年5月、創刊号）、第1巻第8号・第9号（1948年9月、合併号）、第4巻第5号（1951年5月）

